

地域情報(県別)

【山梨】スポーツ・膝疾患治療に特化し、手術件数が6倍に-落合聡司・国立病院機構甲府病院スポーツ・膝疾患治療センター長に聞く◆Vol.1

2020年2月3日(月)配信 m3.com地域版

病院経営に悩む国立病院機構が多い中、スポーツ・膝疾患治療に特化し、患者数が大幅にアップした病院がある。山梨県甲府市にある国立病院機構 甲府病院だ。同院がスポーツ・膝疾患治療センターを開設してから12年が経つが、整形外科の手術件数は開設前の約6倍に増えた。いったいどのようにして患者数が伸びたのか、センター長の落合聡司氏に聞いた。(2019年11月15日インタビュー、計2回連載の1回目)

▼第2回はこちら



スポーツ・膝疾患治療センター長の落合聡司氏

——国立病院機構甲府病院の職員数と病床数を教えてください。

職員数は医師27人、看護師243人(常勤職員213人、非常勤職員30人)、リハビリ職員が22人です。病床数は276床(一般病床270床、結核病床6床)です。

——2007年にスポーツ・膝疾患治療センターを開設されたそうですが、開設までの経緯について教えてください。



スポーツ・膝疾患治療センターの診察室(病院提供)

当院がスポーツ・膝疾患治療センターを開設するまで、山梨県内では膝の治療に対して専門的な治療を施す施設がほとんどなく、満足な医療を提供することができずに、患者さんが来院されても他県の医療機関に紹介することが多いような状況でした。

患者さんの中には、手術をしたくても遠方に出向くことができない方もおられて、痛いのをがまんして暮らしているケースも少なくありませんでした。「それではいけない」ということで、当時私は山梨大学医学部附属病院の整形

外科にいたのですが、整形外科の世界最高峰と言われる広島大学病院の越智光夫教授（現広島大学学長）のもとへ、半年間、指導を受けに行きました。

広島大学病院では、スポーツ・膝医療の専門的な知識技術を磨くことができました。そして2005年に当院の整形外科に入り、2007年にスポーツ・膝疾患治療センターを開設しました。

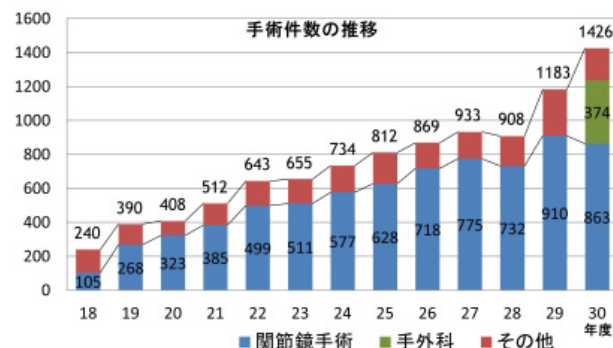
——スポーツ・膝疾患治療センターを開設して以来、病院全体の年間手術件数が飛躍的に伸びたそうですね。



診察中の落合氏（病院提供）

はい。私が当院に赴任した翌年の2006年の年間手術件数は240件でした。その12年後の2018年は1426件に増えたことから、開設前から比べると約6倍の伸び率になります。2005年の時点では100件ほどでしたので、それから考えると約14倍ということになります。

1日に8件ほど整形外科の手術をしますが、その内の5件ほどは膝の手術で、膝の手術の8割ほどは関節鏡視下手術です。



（※国立病院機構甲府病院のホームページより）

——年間手術件数が飛躍的に伸びた理由は、何だと思われますか？

山梨県内やその周辺に、それだけ膝疾患に悩んでいた人が多かったということですね。今まで遠方の病院に通うことができず、治療をあきらめていた人が、当院で手術を受けられるようになったということだと思います。

山梨県にはマラソンなどのスポーツで有名な山梨学院大学があり、山が多いのでトレイルランニングなどの山岳スポーツも盛んです。私は山梨学院ラグビー部のスポーツドクターをしているのですが、その流れで患者さんをご紹介いただくことも多いです。

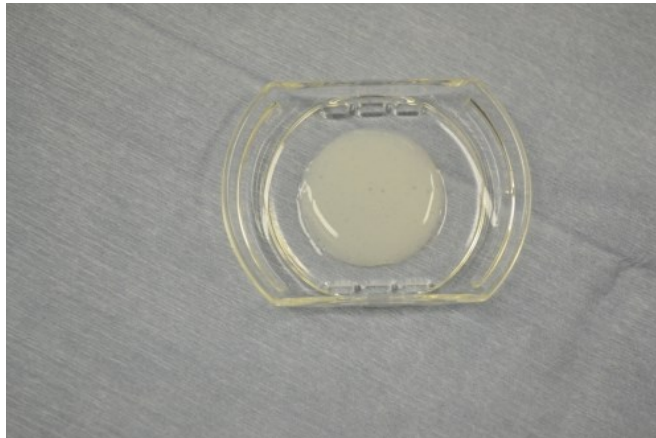
学生のころに当院で治療を受けた患者さんが、大人になって学校の先生になられて、スポーツで障害を負った生徒さんをご紹介いただくこともありますね。また、当院で膝の治療を受けられた内科や歯科の医師が、診療の際に患者さんの膝の障害に気付かれて、当院を紹介してくださることもあります。

最近甲信越地方を中心に、他県の患者さんもかなり増えてきました。スポーツ・膝疾患治療センターを開設する前は、当院で対処できない患者さんを首都圏の病院に紹介していたのですが、今は逆に首都圏の病院から紹介されるケースも増えています。

あとは口コミですね。足を引きずって歩行困難だった方が、ある日突然普通に歩いているのを見て、近所の方が診察に来られることもあります。子どもさんがスポーツでけがをして、当院で手術を受けた後、お見舞いに来られていたおじいさん、おばあさんが膝の診察に訪れることもあります。

患者さん自らが、当院のホームページや私のインタビュー記事をご覧になって、遠方から来られるケースもあります。スポーツで外傷を負って、地元の病院では治療できないと言われた方が、インターネットで検索をして当院に来られるといったパターンです。患者さんの軟骨組織を培養して移植する「自家培養軟骨移植術」という再生医療があるのですが、それを受けたいと言って来られる患者さんが多いですね。

——自家培養軟骨移植術の技術は、広島大学病院で学んだのでしょうか？



少量の軟骨組織から作成した培養軟骨（病院提供）

ええ。私は自分自身がラグビーをやっていたこともあって、学生時代からスポーツ医療にあこがれていました。広島大学の越智教授の講演を聞く機会があり、初めて自家培養軟骨移植術という再生医療があることを知り、とても感銘を受けたのです。

「自分も自家培養軟骨移植術を学びたい」とずっと思っていたのですが、広島大学で学ぶことで、その夢を実現することができました。

——自家培養軟骨移植術などの先進治療に特化することは、病院経営の安定化の一環でもありますか？



甲府病院整形外科の医師。前方中央が萩野哲男院長（病院提供）

そうです。当院の周辺には数多くの病院があり、隣接する他の病院との競合を避ける意味でも、専門的な医療の提供を図る必要がありました。

当院の萩野哲男院長は整形外科が専門で、専門分野に特化した医療を行うことに対して積極的だったため、膝・スポーツ疾患に対する医療を主軸とし、そのひとつとして自家培養軟骨移植術を取り入れることになったのです。

——自家培養軟骨移植術の手術件数は、年間何件ですか？

自家培養軟骨移植術は、適応が大きな軟骨欠損症例に対して行う手術なので、手術件数は決して多くはありません。年間の手術件数は3～4件ほどです。ほとんどの患者さんは、その手前の関節鏡視下手術を受けられています。

しかし、当院で自家培養軟骨移植術を提供できるようになったことは、今まで手術を受けられずにスポーツをあきらめざるを得なかった患者さんにとって、福音になると思います。

自家培養軟骨移植術は、以前は若年層に限られた治療でしたが、最近では中年層にまで適応が拡大しています。60歳の方でも、検査の結果次第では治療を受けられるので、今後は中高年齢層の方も自家培養軟骨移植術を受けるようになるでしょう。



国立病院機構甲府病院（病院提供）

◆落合 聡司（おちあい・さとし）氏

1997年に山梨医科大学を卒業後、同大学整形外科教室に入局。その後整形外科医としてさまざまな病院で経験を積み、2005年4月広島大学整形外科教室で自家培養軟骨移植術を学ぶ。同年10月国立病院機構甲府病院の整形外科に移り、2007年に同スポーツ・膝疾患治療センター長就任。山梨大学整形外科教室 臨床准教授、山梨学院大学ラグビー部チームドクター。

【取材・文・撮影＝伊藤 樹理】